
誰にも話さなかった不思議な体験 5

加納 季里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰にも話さなかった不思議な体験 5

【Nコード】

N2295R

【作者名】

加納 季里

【あらすじ】

部屋や場所といった、毎日過ごしている身近なところにも、科学などで説明できない事があるという事実の話です。

（前書き）

まだまだ、色々な体験をしていますので可能な限り書き続けます。

） １ ） ：ポスター：

皆さんは自分の部屋の壁には何か貼ってあったりしますか？ カレンダーや予定表、あるいは、好きなミュージシャンやアイドルのポスターなどでしょうか。それとも何も貼ったらずにシンプルな感じででしょうか？

高校３年生の頃、私には２歳年下の彼女がいました。

学校こそ違いましたが、ほぼ、毎日のように電話をし、それほど家が離れていなかったもので、会える時には少しの時間でも、たとえば天気が悪くても会っていました。

付き合いはじめて三ヶ月経った頃、彼女が「ベッドの横の壁に黒いシミみたいのができて、イヤだったからポスター貼ったんだ。」

ですから、日常生活で起こった事など普通に話しますから、別に变だとも思わなかったですし、私も普通に聞いていました。そ

れから一週間後、彼女が「ポスター貼ってあるんだけど、なんか变なの。見てくれない？」

何が变なのか分からず、日曜日に彼女の家に行きました。

彼女は、札幌市豊平区K野の団地風の造りのトラックやタクシーなどの運転手の方ばかりが住んでいる４階建てのアパートでした。

彼女は４階の一番端に住んでおり、玄関の横が彼女の部屋でした。

部屋に入ると早速「ちよつと見て。」とポスターを指差し、神妙な顔をしていました。ポスターはどこにでもありそうな、月刊雑誌に付録で付いていた、あるミュージシャンのものでした。

ファンの皆さんのために名は伏せさせていただきますが、現在でも活躍中で、先頃、重い病から復活された方が所属しているグループのポスターです。

何の変哲も無い様にしか見えないのですが、少し離れて見てみると、メンバーの顔つきが違います。違った気がするのではなく、違うのです。

目尻は釣り上がり、口角が耳に近くなっているのです。

何か他に変わった事はないかと聞くと、家でも学校でも、やたらと怪我が増えたという事でした。応急処置ではありましたが、もう一枚その上からポスターを貼りました。最近、再結成したレコード大賞を受賞したことがある女の子二人組のポスターです。

私は二日後から修学旅行だったので、異変があっても丸四日間は何もできません。

彼女には寝る時は床に布団を敷いて寝て、またポスターが変だったら違うポスターの上に貼るように告げ、彼女の家を後にしました。

私はその事を気にながら、修学旅行二日目に奈良の仏閣を巡っていました。

その最中に、たく鉢のお坊さんに出会いました。

その方は、和歌山県の真言宗最高峰といわれる高野山より、こちらに來られている方でした。

私の話を聞くより先に、近しい人に災いの気があると言われ、事情を説明すると、その方が持っていたお守りを渡され、ポスターを剥がし、壁に直接あてがいなさいと言われました。

修学旅行から帰った私は、彼女の家へ行き、ポスターを見ると、こちらを睨みつけている様な、物凄い形相になっていました。

私はなんとかしたい一心で恐る恐るではありますが、ポスターを剥がしました。彼女の話では、最初はシミ程度だったと言っていました。人の顔ぐらいになっていました。早速、お守りを壁にあてがい彼女に経過を見るように言い、それから二日経った時、それは消えていました。

彼女が住んでいた場所は、元々、刑場で、鎮魂碑があったらしいのですが、アパートを建てる際に移動ではなく、取り壊してしまったそうです。

ポスターの顔も元に戻りましたが、それ以降、彼女も私も壁のちよつとした

シミや汚れに敏感になり、たとえ学校であろうとカレンダーやポスターなどを貼る時には、隅々まで念入りにチェックするようになりました。皆さんも、部屋の壁に何か貼る時には、シミなどがあつたら気を付けて下さい。

） 2 ）

：ツいてない場所：

最近、テレビや雑誌などでパワースポットや、風水や占いなどで縁起の良い方角など、様々取り上げられますが、実践されたことはありますか？また、信じていますか？私は、少なからず信じています。やはり、縁起が悪かったり、ツいていないよりは 良い方がいいですね。ただ、その逆に、何かをしても、絶対にウマくいかなないマイナスのスポットもあります。運が悪いとかツいてないとかの類いではありません。何かの力によ

って、操作されているかのような場所があるのです。

私は28歳の頃、あるパチンコ店で役職者として勤務していました。その店は、北海道では初めてそれまでのパチンコ店のイメージを脱し、本州のパチンコ店の様な、クリーンなイメージを印象付ける、画期的な造りでした。

北海道の遊戯協合理事長の店ということもあり、全道から様々なオーナーや役職の方の訪問も多く、オープン日には、2000人を越えるお客様が足を運び、札幌市のあらゆるマスコミが押し寄せ、その度に私はインタビューや取材を受け身動きをとるのも一苦勞なほどでした。店の上が寮になっており、12部屋あつたのですが、109号室に入寮する社員だけは、何故かすぐに辞めてしまつたり、100パーセントの確率で体を壊していました。店ができた年経つた頃、A野さんという、それまで通いで勤務していた社員が、家庭の事情で入寮しました。私は、

A野さんと物凄く仲がよかったのですが、入寮して僅か二ヶ月目から、日に日にA野さんの顔つきが変わってゆき、頬はこけ、目は

奥ばり、肌の色は青白くなり、とても健康的には見え、心配していたところ、勤務中にバツタリと倒れてしまい、すぐに救急車で運びました。

病名は、胃癌でした。ま

だ、末期ではなかったので、手術をすれば助かるということでした。入院の手続きをし、着替え等を取りに寮へ戻り、A野さんの109号室のドアを開けた瞬間、そこにいた、私、部長、専務の3人は、薄暗い部屋の中で、黒い影のようなものが動いているのを確認し、とっさにドアを閉めました。

これは単なる心配事では済まない、詳しい事情を外部や社員にさえ知らせずに、翌日、札幌でトップの霊能者の方に来ていただきましたが、これは私では無理ですと言われ、その方のツテで、当時、あらゆるメディアに出演していた、G保さんに来ていただきました。

ドアを開けた瞬間、G保さんは「強力過ぎる。一度や二度のお祓いでは無理です。」と言われ、部屋のドアにお札を貼り、絶対に開けないようにと言われました。

私は、近所に住む顔なじみの方に、それとなく話を聞いてみると、この場所は何をやってもダメな場所で、過去には、家具店、金物店、タクシー会社、スーパー、全て原因は不明ですが、ダメだったそうです。

A野さんは、胃を4分の3切除し命こそ取り留めましたが、職場には復帰できませんでした。

私はその三

ヶ月後、店を移り、結局その店は、社長の親族間の争いにより潰れてしまいました。

やはり、あのドアを開けた瞬間に見た、黒

く動めいていたものの仕業なんでしょうか。

（後書き）

誰かに聞いた話とかではありません。

全て私

が体験した事です。で、読んでいる方にも起こりうる事だというのがふまえて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2295r/>

誰にも話さなかった不思議な体験 5

2011年2月27日04時55分発行